

行事・まつり



寒餅つき

神前地区の農家に伝わる年中行事の一つに「寒餅つき」があつまむ。

最近では仕事の多様化、生活の変化などによって徐々に影をひかめ、寒餅をつく家庭が少なくなっています。

この行事は、大寒（冬の間で寒さの厳しいとき）の頃の水を使って餅をつき、かき餅やあられを作ることから寒餅つきと呼ばれています。

この時期は一年中で空気が一番乾燥する季節だけに物を乾燥させるには最適な条件であるとともに、水温も低く、雑菌などの繁殖を防ぐ寒の水を餅つきに使用したようです。



昔は各家庭でたくさんんの餅をつきました。子どもの大勢いる家庭では、二～三俵（一俵は六十キログラム）もの糯米もちこめをついて、あられや、かき餅に加工して、一年中の子どもたちのおやつに当てるものでした。

寒餅つきは夜の明けきらないうちから始まり、かまどに火をあこして、二段程に積みあげた「セイロ」で糯米を蒸し上げます。杵きねと臼うすを使ってかけ声も勇ましく行われ、餅をつく杵音きねおとを床の中で夢うつづに聞いた、幼いときの記憶があります。

その頃の子どもたちにとって、寒餅つきは素朴さの中に楽しさもある、いつまでも心に残る行事の一つであつたように思われます。

早朝から始まつた餅つきは夜まで続けられて、翌日からはあられやかき餅切りに大人たちは全員で取り組み、夜なべまでして作業が行われています。



赤、青、黄色、豆入り、のり入りの五色に染められたあられやかき餅は、座敷や居間に、七段、八段と組まれた蚕棚（複数段ある蚕を飼う棚）の上に筵を広げて所狭しと干されます。一ヶ月程して寒の冷たい空氣の中で程よく乾燥されて出来上がり、あられやかき餅は缶に入れて保管されました。そして子どもたちのおやつや野良仕事の小屋（間食）として食われました。

こうして、自然とその時代の生活の中から考へ出された人々の知恵には、永い時代を経た今も「なるほど」と頷ける思いがします。

御鉢みくわのまつり（祈年祭きねんさい）

鈴鹿の山の峯々の雪が解けはじめると、枯草の間より落の臺や蓬の新芽が顔を覗かせ、やがて里には春がやってきます。

里では、冬の眠りより覚めた山川のようすも活氣づき、急に辺りが明るくなつたような思いがします。

こうした季節の変化を私たちの郷土では「山の神」が里に降りてこられたといい、神様をお迎えするための「御鉢のまつり」と称する春まつりが毎年行われています。

このまつりほどした理由からかは定かではありませんが、各町ごとに祭礼の日が異なり、一月二十三日から始まつて三月の上旬まで行われています。



春まつりは秋の収穫祭ほどの盛大ではありませんが、春風にのって神社より聞こえてくる太鼓の音には何となく心浮き立つものを感じます。

さて、このまつりの祭神ですが、「おおやまみのうら大山祇命」だと謂われており、農業を司る神様だという意味から、農家では神を迎えることを祝つて、たゞやこの「なぐ」を作つてしまつたのです。

春まつりの「なぐ」と云へば、その一つにいつまでも忘れないことができない春の味覚があふれる「なごみ

蓬だんごは一見したところ草餅と変わりませんが、草餅よりも柔らかで、一口食べてみると口中に新芽の蓬の香りが広がり、つぶさに春の訪れを感じずにはいられません。今も私たちの感覚の中に「御鍬のまつり」と聞けば、蓬だんごの懐かしい味がよみがえつてくるのです。

このまつりではありますが、春の訪れを祝うまつりの翌日からは、百姓は野良に出て、百日間鍬を持って農作業に励まなければならぬ」という神が定められた言い伝えがあります。農家の多い私たちの地区では、この先も形は違ひあれ、春まつりの「御鍬のまつり」は郷土に永く伝えられていくことだと思います。



釈迦入滅と花供御団子



寺方町の大日さんの名で親しまれる高角山大日寺には、嘉永年間・約百五十年前に製作された長さ四メートル・幅約三メートルの涅槃尊像の仏画が所蔵されています。この仏画は、金箔の色彩も美しく、保存状態の良さがうかがえます。

毎年、釈迦入滅の日である旧暦二月十五日（現在の三月十五日）に、この涅槃尊像の仏画のご開帳として

涅槃会が開催され、多くの参詣者でにぎわいます。

また当日は、境内で花供御団子や甘酒がふるまわれます。

花供御団子は前日の十四日に檀家が白・黄・緑・赤の四種類の団子餅（もち米〇・八キログラム、米粉一キログラム）を各色一臼ずつ搗き、長く伸ばしておきます。翌日朝より約一・五センチメートルの長さに切り、色々な色の団子餅を袋に詰めて寺方町一区の全戸に配ります。地域の子どもから高齢者までみんながこの日が来るのを心待ちにしてこられるのではないでしょか。



はな 花まつり



四月八日は仏生会の「花まつり」。

お釈迦さまの降誕を祝う仏教行事の一ひとつとして、古くより全国各地のお寺で花まつりが毎年行われてきました。

神前地区のお寺でも、寺方町の大日寺・高角町の金剛寺・曾井町の觀音寺と三つのお寺で、今も花まつりの行事が催されています。

高角町の金剛寺の花まつりは、通常の四月八日に行われていますが、しばらくの間この寺の花まつりも何かの都合で長く休んでいました。ところが檀家(だんか)の希望により花まつりを再開する羽になり、以前のように花まつりが復活することとなりました。

花まつりの日の金剛寺では、朝から善男善女の参詣者で賑わい、子どもたちも交じつて、花御堂の中のお釈迦さまに甘茶をかけている楽しそうな姿も見受けられます。

金剛寺の花まつりより約一ヶ月遅れて、五月五日に大日寺の花まつりが催されます。

大日寺の花まつりでは、本堂の中で二メートル四方ほどに春の花を敷詰め、花のじゅうたんの上に四方が五〇センチ、高さが八〇センチの小さな花御堂と呼ばれるお堂が安置されます。屋根を菜の花やれんげ草、つつじなどの花で飾り立てて花御堂を作り、その中央に童子の釈迦像があ立ちになつてあられます。

花まつりに訪れた参詣者は、小さな柄杓で甘茶を汲んでは一杓二杓とそれぞれの祈りをこめてお釈迦さまの像にかけて行きます。大日寺では花まつりの参詣者に地元



の人たちの協力で作つた甘茶がふるまわれます。

昔から甘茶は邪氣祓い、病にも効くとも言われていて、参詣者は田頃口にしない珍しい甘茶の風味を楽しんでいるようです。

こうした素朴でささやかな行事ですが、日本の仏教行事の一つとして永く続けられてきた花まつりも、最近では時の流れの中で次第に忘れられ、全国的に花まつりの行事を行わなくなつたお寺が増えているようで、なんとなく心淋しいものを感じます。

しかし、幸いにも神前地区では今もこうして三つのお寺で花まつりの行事が行われていることは大変嬉しい、この先も地域に温かく素朴な花まつりの行事が長く続けられていこうと願いたいものです。

あんどう 行燈まつり

七月にもなると、新聞やテレビなどで楽しそうな夏祭りの様子が全国各地より届けられますが。私たちの町、神前地区においても、遠い昔より今日に至るまで行われてきた、「行燈まつり」があります。

この祭りは、毎年七月三十日と三十一日を水無月の田とじつて、永年にわたるまつりをとり行つてきました。

まつりの起源については定かではありませんが、人伝えに聞くところによると、昔より農業地区であった神前では、田の稻を害虫の被害より守るために、人々は夜になると松明たいまつを掲げて田んぼの周りを廻つたそうです。そうしたところから「虫追いまつり」と、異名がついたられたとも言われております。

その虫追いまつりの名も長い年月の経過の中で、いつの頃からか「行燈まつり」と名が変わりました。もう少し、その由来百姓の「野の上あがり休み」を兼ねた夏まつりとなつたようです。

農家では朝から寿司やいばら餅などのごちそうを作つて、農繁期の疲れを癒す一日としていました。ですが、今ではもう「野上がり休み」という言葉は聞かれなくなりました。しかし行燈まつりは子どもたちが主体となって、現在も続けられています。

真夏の暑い一日が終わり、あたりが暮れ始めるに、神社の境内に奉納された箱型の行燈に火が点じられます。

その火の入った行燈のまわりで歓声を上げてはしゃぎまる子ども達の姿は一ヶ月余りの日数をかけて行燈を完成させた大きな喜びに満ちあふれています。

夕闇の中、ろうそくの淡い灯に浮かび上がる行燈に描かれた絵はどの絵も力作揃いで、子ども



もたちの祭りへの心意気のようなものを感じずにはいられません。

行燈の淡い光の中を浴衣姿で訪れる家族連れの姿が多く見られ、夏まつりならではの雰囲気が感じられる中、見物の人々は行燈を一つ一つこいねいに見て歩きながら、「上手だねえ、うまいものやなあ」などと賞賛の言葉を惜しみません。

こうして大人と子供もが共通の楽しみを持つことのできる、「行燈まつり」。多様な時の流れの中にあっても見失うことなく、郷土に根ざしたみんなのまつりを地域で大切に守り、親から子へと、末永く伝えていきたいものだと思います。

秋まつり

秋晴れの空の下、ハタハタと鎮守の森にはためく祭禮幟ちんじゆさいれいひき、十月を迎えると神前地区では秋の豊年まつりが行われます。

今では以前のような盛大さはなく、祭禮の前日に神社の氏子ごしが、幟を立て、当日には、氏子によって、まつりの神事がとりあこなわれています。

ふり返ってみると、昭和四十年頃までの秋まつりはとても盛大なもので、春まつり・夏まつり・秋まつりと三大祭禮の中でも一番大きなまつりであり、町をあげての行事であるのと同時に、人々にとつても心楽しいものでした。

当時、祭禮を迎える前日は、じこの家庭でもまつりの準備に大わらわで、餅をついたり、寿司の具を煮る甘い匂いが漂っていました。

まつりの当日となれば、朝早くから神社に祭禮太鼓が鳴り響き、神明神社しめいじんじゃでは境内に出店などが陣をはり、子ども達の喜びそうな綿菓子やカルメ糖、赤い紙の帶で結わえたニッキの束・ラムネ・のしいか・ヨーヨーボール・お面などが売られ、子ども達はまつりの小



それにはこの秋まつりには欠かすことのできないものの一つに獅子舞があり、神前地区のほとんどの町で行われていました。各町ごとに獅子舞の流派は異なりますが、秋まつりのメインとなっていたようです。獅子頭となる大人・口取りの子ども・笛・太鼓を奏^{かな}でる大人といった、大人と子どもが一体となつて演じる舞でした。

祭禮の朝、最初に神社に出向^{ほうのう}き、神前^{しんぜん}にて獅子舞の演舞を奉納し、その後獅子舞を依頼した家々を訪れ、舞を奉納して歩くのでした。依頼した家では、庭に二十枚ほどの新垣^{しらべ}を敷き、演舞場所を用意しました。

やがて澄みきった秋空の下を「一ヒヤロ、ド

ン、と笛と太鼓の音を鳴らしながら、真っ赤なお頭の獅子の一^ハ行がやつてきます。

依頼主の家では、町へ嫁いでいる娘や親戚など^{しゃくせき}の招待された祭り客が、開け放たれた縁側に座つて舞を鑑賞し、ピーヒヤロ・ピー・ピ・ピ・オヒヒヤリホと笛と太鼓に合わせて軽快にかつ勇壮に舞う獅子の演舞に、喝采^{かっさい}を惜しみませんでした。

当時のまつりの花形であつた獅子舞も、現在行われているのは、寺方町・高角町のみとなつてしまい、盛大であつた秋まつりも今では遠い思い出の一つとなつてしまいましたが、郷土に根付いていた秋まつりの行事として、末永く残していきたいものです。



亥の子

旧暦十月、亥の日におこなわれる子供たちの行事です。早いところでは十一月三日、遅いところでも十一月十日までの間にあこなわれていたようですが、現在では十一月二十三日の勤労感謝の日に実施される地区が多いようです。

米の収穫が手作業であるなわれていた頃、稲穂の乾燥は稻架掛けか天日干しが一般的でした。天日干しの時はかど（庭）いっぱいに蓮を広げて乾燥するのが農村の秋らしい風景でした。このように屋敷一面を地なりしして干し場とするため、いのこで叩いて地固めしたとも言われています。また、猪はたくさんの子供を産むことから、来年の豊作を祈願しているのこをつくとの説もあります。

十一月二十三日、氏神様は新嘗祭にいなめさいが斎行されます。各家庭では収穫に感謝して仕事を休み、ぼた餅を作り祝いました。といひによつてはいの餅を神様に供えるといひもあります。

曾井町では「いのこ保存会」の子どもたちが朝から各家庭をまわり、菊・南天など秋の

花を集めて、花飾りみこし・かぎり山車だいを作ります。そして今年収穫した藁を細縄で縛つてこのを作ります。つき始めは「大いのこ」で景気をつけますが、その大いのこは芯に竹などを入れて打ち鳴らした時にいい音が出るよう工夫して、参加者全員で作ります。

夕方になると子どもたちはいのこを持って氏神様へ集まり、まず氏神様へいのこを奉納して、それから二班に分かれて花飾りを中心として各家庭を回ります。最初に大いのこを三回打ち鳴らし、その後「いのこの唄」に合わせ力強く地面を叩きます。

いのこのものは
ついてもついてもあれません



むひとつひごたらおれすぎた
おまかにいまとひでツコイシコ

この「ごのいの里」は各町によつ歌詞が少しずつ違うようです。

各家庭では、子どもたちの労に感謝して祝儀を出します。最近はお金が一般的ですが、戦中・戦後しばらくはお菓子・学用品などをいただくこともありました。祝儀を子どもたちで分けるのも楽しみの一つで、高学年ほど分配金が多いのは伝統として今も引き継がれています。いのこは昔は男の子の行事でしたが少子化の影響もあり、今では小学校一年生から六年生の男女全員が参加するようになりました。



山の神やまのかみの行事ぎょうじ

山の神（大山祇命）おおやまみのみことは「御鍬みくわまつり」に里に降りて来られ、十一月七日に山へ帰られるため仏堂形態ではなく、組・瀬古単位で祀まつってきた「組祭祀」による信仰の典型です。

山の神の祭神は明確ではなく、ほとんどが山の神と刻印された自然石の丸石であり、それも明治四十一年頃の神社合祀こうしによってそれぞれの氏神うじがみさんへ移設されました。

行事としては組単位で十一月七日に餅つきを行います。組の家族全員が集まり、伸し餅を作り山の神の石碑にあ供えするため宿は朝暗あさひいうちから糯米もちごめの蒸しを上げ、組家族は四時頃から餅つきをして、あ



んご餅、おろし餅、菜餅、ぜんざいなどを作り賑やかにいただきました。

山の神のお供え餅の種類は地区により異なります（注）が、寺方町では一年生から六年生までの子どもが山の神にお供えし、そのお下がりの餅を子どもがいただき、六年生が半分、五年生がその半分と段々と少なくなり一年生はかき餅一枚ぐらいしかもらえないが、子供たちの楽しみもあり、子どもたちは山の神が待ち遠しかったものです。

神前地区では餅を食べた後、大人たちは神前小学校での農産物品評会（現在の文化祭）が行われ、農産物は午後二時頃からの競り^せにかけられ、地域の人と人とのコミュニケーションが図れる機会になっていました。山の神の行事を行う地区も年々少くなり、現在では菅原町だけで続けられています。

(注) 菅原町：鏡餅、寺方町一区：伸し餅、高角町：丸餅

神前神社のお木曳き

神前神社のお木曳きとは、伊勢神宮で一十年に一度行われる式年遷宮の翌年、撤去された伊勢神宮の鳥居の古材を神前神社として拝受し境内に建立するため、その御用材を神前神社に運び込むときの行事で、高角町の自治会役員と神社の氏子総代が中心となり氏子全員が参加して行う二十年に一度の最も盛んな祭事です。

式年遷宮は一三〇〇年の歴史がありましたが、外宮の鳥居の古材を下賜されて行う神前神社のお木曳きは慶長四年（一五九九）頃からと伝えられており、それ以来約



四〇〇年間続けられました。昭和に入つてからも昭和五年、昭和二十九年（戦争により延期される）昭和四十九年、平成六年の四回が開催されています。

昭和五年の時には御用材を伊勢から四日市港まで船で運び稲葉町の築港からお木曳き車で神前神社まで曳いてきましたが、昭和二十九年の時は尾平町の柳橋（現在の尾平橋付近）、昭和四十九年と平成六年の時は高角橋までトラックで運搬し、それぞれ柳橋・高角橋からお木曳きを行っています。

お木曳きの行列はまず袴姿の役員が先頭に立ち、御用材は紅白の布等で飾つて台車に乗せ、その上に煌びやかな衣装を着けた音頭取さんが乘ります。その御用材の前後には揃いのま





つり半纏を着た氏子が台車に付けた引き綱を手に手に持つて並び、まつりにふさわしい華やかな行列となります。音頭取さんの唄う木遣り節に合わせて全員が大声で掛け声をかけて出発します。途中、前進・後退を繰り返し進むため大変ゆっくりとした行進となります。また、行列が家並みをはずれ田園地帯にさしかかると御用材を左右に振り回すため青田に飛び込む氏子が出るなど、賑やかに威勢よく行列は進められます。御用材は、西瀬古・中瀬古・下瀬古・子ども用の四台の台車に乗せ、それぞれ別々の経路をたどって神前神社に運ばれるため、その日は高角町内のあちらこちらで歓声が上がります。高角町内を約半日かけて威勢よく練り回った行列が最後に向かうのが、各台車のコース上唯

一の難所である神前神社正面の石段です。引き手全員が力を合わせて、石段に沿つて仮設された足場の上を台車ごと引き上げる時、お木曳きは最高潮となります。（ただし、仮設足場は危険防止のため平成六年から設置されることになりました）

四台の台車に乗せた御用材が神前神社境内に勢ぞろいすると、お木曳きの成功を祝つて参詣者と氏子による万歳の大合唱が起つり、境内がわれんばかりの歓声に包まれます。